

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 7 年 6 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2023～2024

課題番号：23K17097

研究課題名（和文）中国における「国際開発研究ブーム」：非欧米社会の開発知識の可能性

研究課題名（英文）"Boom in International Development Studies" in China: Exploring the Potential of Knowledge Production in Non-Western Societies

研究代表者

汪 牧耘 (WANG, Muyun)

東京大学・大学院総合文化研究科・特任助教

研究者番号：00968513

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本科学研究費補助金事業において、単著1冊、共著本4冊、学術論文8本を発表し、多面的な研究成果を創出した。研究の前半では中国における開発学の形成過程と展開を詳細に検討した。その成果としての単著『中国開発学序説』は、第28回国際開発研究・大来賞を受賞した。後半においては日中韓における開発学の形成過程を比較・分析した。特に、日本と中国の開発学における差異をより精緻に分析するため、学術雑誌の文献分析を実施した。さらに、研究者のポジショナリティを考慮した国際開発研究の手法として、留学生を対象としたオートエスノグラフィー手法による共同研究を主導し、当事者の視点を学術的に位置づけることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、中国など非欧米社会の開発思想を学術的に位置づけることで、従来の欧米中心的な理論に代わる多様な視点を提供し、グローバルな開発論をより包摂的なものに変える基盤を築くことを試みた。次に、日中韓の開発学を比較することで、政治的対立を超えた学術的相互理解を促進し、将来の地域協力に向けた知的インフラを整備したのである。最後に、留学生のオートエスノグラフィーにより、当事者の視点を学術研究に組み込むアプローチの可能性を探り、再帰的・批判的開発論の具体的な行い方を示したと考える。本研究事業は、学術界の多様性の促進と国際協力の施策において、実践的価値を持つ知的資源であると考えている。

研究成果の概要（英文）：Through this KAKEN project, I published one sole-authored book, four co-authored books, and eight academic papers, generating multifaceted research outcomes. In the first half of the research, I conducted a detailed examination of the formation process of development studies in China. As a result of this work, my sole-authored book "Introduction to Chinese Development Studies" received the 28th Okita Award for International Development Studies. In the latter half of the project, I conducted comparative analysis of the formation processes of development studies in Japan, China, and South Korea. To analyze the differences between Japanese and Chinese development studies with greater precision, I implemented systematic literature analysis of academic journals. Furthermore, as a methodological approach for international development research that takes into account researchers' positionality, I led collaborative research employing auto-ethnographic methods with international students.

研究分野：国際開発研究

キーワード：国際開発 知識生産 言説分析 中国 日本 非欧米社会

1. 研究開始当初の背景

国際開発研究 (international development studies) は、第二次世界大戦後の低開発地域の経済成長を促すために、欧米で発足した学問分野である。一方、二十一世紀に入ってから、中国は非欧米社会の代表格として、国内の急速な経済成長に伴い、国際開発という独自の開発経験や国家観を示す知識体系の構築にも力を入れている。本研究は、近年中国国内で起きた「国際開発研究ブーム」に着目し、その学術成果を中国の言語的・社会的文脈に基づいて分析する。それを通じて、先行研究の空白を埋め、学術世界の「欧米中心主義」を批判的に検討するとともに、非欧米社会における知識生産の可能性を試論する。

2. 研究の目的

ここ十年、「南南協力」や「一帯一路」構想の展開が拡大している中、多数の中国人研究者が国際開発というテーマに積極的に取り組むようになり、さらに独自の国際開発研究を打ち出そうとしている。彼らによる国際開発研究はいかなるものであり、第二次世界大戦後の欧米社会が主導してきた国際開発研究とどう異なるのか。このような問題意識をもとに、本研究は、近年中国国内で起きた「国際開発研究ブーム」に着目し、その中身を明らかにする。具体的には、① 中国政府の政策方針、② 主要な研究機関の設立経緯・活動内容、③ 代表的な中国人研究者の経歴・学術成果という3つの側面に着目しながら通時的な言説分析を行い、中国の国際的発言力を支える学術的な土台を考察する。それを踏まえて、多元的な開発知識を生み出すために、非欧米社会の国際開発研究が持っている課題と可能性を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は文献調査と現地調査を通して、中国における「国際開発研究ブーム」の生成と展開を明らかにし、国際開発研究の脱欧米中心主義の可能性を考察する。そのため、計画当初では、中国の国際開発研究に関連する機関の活動と代表的な研究者の学術成果を中心に分析を行う。なかでも、2010年代以降の動きに着目する。具体的には以下の計画を進めていく。

①. 文献調査(2023.4-2025.3) : 具体的には、以下の3つのカテゴリーを中心に調査を進める。

【A】 中国政府の政策方針、具体的には国際開発・対外援助に関する政策指導者の発言、政策、法律の変化および国家研究基金とその採択状況等の情報を収集し分析する。

【B】 中国における国際開発関連の代表的な研究機関、具体的には、大学の研究院(計9ヶ所、例: 北京大学国際開発研究院)、政府系研究機関(計5ヶ所、例: 国務院国際開発知識センター)、研究所・シンクタンク(計7ヶ所、例: 上海国際問題研究所)等の沿革・活動内容を中心に整理する。

【C】 国際開発研究に携わる中国人研究者の経歴・分野・学術成果・講演記録を対象に整理を行う。彼らの著作における鍵概念・論点・理論・主張等に着目し、その論理を類型化する。なかでも、多くの成果を出してきた15ヶ所の大学・研究機関の研究者に焦点を与える(計35人)。

②. 現地調査(2023.8-2023.9、2024.8-2024.9) : 【D】 【A・B・C】の結果を踏まえながら、各研究機関・研究者の現状と課題をその内側の視点から理解する。具体的には、以下の2つの方法を中心に調査を進める。

【D-1】資料収集：【A・B】で述べた各研究機関の非公開の資料・会議録、中国国家図書館の関連資料を補足・整理する。【D-2】インタビュー：【B・C】で述べた研究者、研究機関の担当者・元担当者等を対象に、その学術活動に影響を与える政治的・経済的環境、専門分野の訓練、国際開発に携わる経緯等を聞き取る。

また、比較の視点を持つため、実際の研究において、中国にかぎらず、日本の国際開発研究の歴史と展開についても調査を行った。

4. 研究成果

本研究は、近年中国国内で起きた「国際開発研究ブーム」を出発点として、その学術成果を中国の言語的・社会的文脈に基づいて分析し、さらに東アジア諸国における開発学の形成過程を比較検討することを通じて、学術世界の「欧米中心主義」を批判的に検討するとともに、非欧米社会における多様な知識生産の可能性とその意義を明らかにすることを試みた。本科学研究費補助金事業において、この問題関心に基づき、単著1冊、共著本4冊、学術論文8本を発表し、多面的な研究成果を発表した。

研究の前半では、この問題関心の核心部分として、中国における開発学の形成過程と展開を詳細に検討した。具体的には、中国における国際開発研究の受容と展開に着目し、国際開発という名を冠した研究・教育機関の設立経緯と、その代表的な中国人研究者の研究活動を分析した。その結果、中国における国際開発研究が欧米の国際開発研究を吸収することから始まり、それに合流したり抵抗したり、さらに差異化を図りながら拡大してきた過程が明らかになった。この過程で中国人研究者は自国の国際開発の価値を「西洋」との差異化と国際的開発目標への接近に求め、実用主義を用いた理念構築と開発効果の実証研究を通して示そうとするという今日の特徴が形作られた。こうした中国人研究者の動きは、非欧米社会における独自の知識生産の一例として位置づけることができる。この成果としてまとめられた単著『中国開発学序説』は、第28回国際開発研究・大来賞を受賞した。

研究後半においては、中国のみならず東アジア全体における非欧米的知識生産の可能性を探るため、日中韓における開発学の形成過程を比較・分析した。例えば、韓国の「セマウル運動（新村運動）」を事例として、異なる国の研究者が特定の開発経験を異なる視点から解釈していることを実証し、アジア各国の文脈によって形成された開発経験評価の視差を明らかにした。また、日本と中国の開発をめぐる知識生産の差異を精緻に分析するため、「三位一体」という政策の概念史研究を実施し、中国の援助国としての台頭とともに議論されるようになったこと概念が、援助・投資・貿易を同時に行うモデルへと説明されるようになってきた過程を解明した。さらに、2023年改定の日本の開発協力大綱に対する中国国内の議論や認識を分析し、中国内部の多様な視点を考慮することの重要性を論証した。これらの分析は、欧米中心的な開発研究の枠組みを相対化し、東アジア諸国における多様な知識生産の実態を明らかにするものである。

研究手法の革新として、留学生を対象としたオートエスノグラフィー手法による共同研究を主導し、当事者の視点を学術的に位置づけることを試みた。これらの分析を通じて、開発経験の国柄や独自性を訴える動きがナショナリズムに回収されやすい自国最良の知識生産に陥る危険性や、「脱欧米中心」の試みが陳腐な批判になりかねない問題を指摘した。

本研究は、中国の「国際開発研究ブーム」の分析から始まり、東アジア諸国における開発学の比較検討を通じて、欧米中心的な知識生産に対する非欧米社会からの多様なアプロー

チの存在を実証的に明らかにした。中国における開発学の独自の展開、日中韓それぞれの開発経験解釈の視差、そして研究者自身のポジショナリティを考慮した新たな研究手法の試みは、いずれも従来の欧米中心的な学術枠組みでは捉えきれない知識生産の豊かな可能性を示している。同時に、非欧米的アプローチがナショナリズムに回収されやすい危険性も浮き彫りになった。今後は、欧米中心主義への単純な対抗ではなく、中国、日本を含む東アジア諸国が相互の差異を認識しつつ、多角的な探究を許容する開発学の新たな知的基盤の構築に向けて、さらなる研究を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 汪 牧耘	4. 巻 104
2. 論文標題 日本の開発学はどうなりうるか：中国人元留学生のオートエスノグラフィから覗くその未来	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 227～248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002009756	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 汪 牧耘	4. 巻 64
2. 論文標題 中国における国際開発研究の受容と展開 脱「欧米中心主義」の可能性の一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア経済	6. 最初と最後の頁 31～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24765/ajiakeizai.64.3_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kim Soyeun, Wang Muyun, Sato Jin	4. 巻 23
2. 論文標題 Development Knowledge in the Making: The Case of Japan, South Korea and China	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Progress in Development Studies	6. 最初と最後の頁 275～293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/14649934231173824	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Muyun Wang, Jingyuan Wu, Tingyu Hou
2. 発表標題 Exploring the Characteristics and Potential of International Development Studies in Japan: Perspectives of Chinese Students
3. 学会等名 The Asian Conference on Education (ACE2023)（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 汪牧耘
2. 発表標題 知識の“去（欧米）中心化”何以可能：以日本の国際発展研究為例
3. 学会等名 中国商務部・国際発展合作研究所・青年智匯003 調研与思享系列（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 汪牧耘	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 316
3. 書名 中国開発学序説	

1. 著者名 Jin Sato, Soyeun Kim (eds.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 253
3. 書名 The Semantics of Development in Asia: Exploring 'Untranslatable' Ideas through Japan (The University of Tokyo Studies on Asia)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------